

## 核燃料サイクルに関する課題を積極的に解決 ―二世紀に貢献する観点で新長期計画を策定―

【民間から初めての委員長就任ですが、ご感想と抱負についてお伺いします】



原子力委員会・藤家委員長

**誠実かつ積極的に全力投球する  
夢と現実が共存する原子力行政**

確かに大変大事な役をおおせつかったのですが、この仕事は相当重要であると同時に難しいので、私が責務を果たすことができるのかどうかよくわかりません。

しかし、民間の学識経験者が原子力の専門家になったことについて、私は非常に大事に考えたいと思っていますし、誠実かつ積極的に全力投球で取り組んでいきます。

原子力委員会には、原子力政策の企画・立案と調整の二つの仕事があります。

私は性格的に、企画・立案のような仕事は好き

な方ですが、調整のような仕事はあまり得意ではありません。

しかし、二世紀の原子力はリサイクル社会、リサイクル文明に向けて、原子力に何ができるかを問われていますので、原子力を利用してできるものの全体的な姿を見せたいうえで、どういう長期展望を持って臨めばよいのかを示し、夢と現実を上手く調整しながら、言い換えれば夢と現実のバランスある共存について、皆さんに分かってもらうことに力を入れることが大切ですし、今後も努力していきたいと思っています。

**個性豊かな人材づくりが一層重要**

私は原子力の世界に四〇年間関わってきています。

このうち、国の安全審査には二〇年間、原子力委員会を六年間経験しています。これらの経験から、原子力のために何が大事で必要なのか、難しいところは何か、どうすればよいかということをつまきミックスして考えることができると思いますし、すでに、これまでの日本の原子力行政に反映させてきたと思っています。

また、新しい原子力委員会が発足する時に「いつでも、どこでも、だれとでも対話をする」ことを委員会の柱にして、国民の皆さんに分かりやすく原子力を分かりやすく理解していただくと思っています。

【学識経験者の発想で委員長としてやってみたいことは何でしょうか】

これまでの日本の社会は、リーダーシップのある人材を求めていなかったし、リーダーシップのある人を育てないで、逆につぶしてきました。

最近になってやっと、指導力やリーダーシップのある人材が求められるようになりましたが、原子力の分野でも、将来のためにより多くの個性豊かな人づくりをしていかなければいけないと強く感じています。個性豊かな人づくりがこれからは、さらに重要だと思えますし、推進していきたいと思っています。

【新しい原子力委員会の進め方と委員会が抱えている課題についてお伺いします】

原子力委員会が、従来の総理府から内閣に移ったことは時代の変化のなかで、一つの英断だったと強く思います。

それだけに、委員会としての力を十二分に発揮できないと何のための委員会なのかと言うことになってしまいますので、お叱りを受けないように頑張りたいと思っています。

### 核燃料サイクル関連課題の解決 将来も平和利用の原子力政策を

今の日本の原子力が抱えている現実的な課題は多くあります。まず、原子力発電そのものについては、非常に高品質で熟成化された技術だと思っていますが、残念ながら核燃料サイクルの実用が二一世紀へ持ち越されてしまいました。

現在、抱えている使用済み核燃料の再処理や高放射性廃棄物の処分など、ほとんどの課題が核燃料サイクルに関連しています。

早くこの課題を解決するには、官民が役割分担に対して、棲み分けから相互乗り入れの観点で、問題の対処に当たらなければいけません。そして、長い原子力の将来を見たらうで、将来につながる

良い解決策をたてなければならぬと認識しています。

【原子力を巡る今後の展開と新たに取り組もうと考えておられることについてお伺いいたします】

高度に民主主義が発達した国では、どんな政策でも国民の理解と協力がなければ進められません。その協力が得られるように努力を重ねていきます。

また、国際社会に対しても同様ですが、冷戦構造下では、米ソ超大国の対立のなかで世界的な観点からものを言うことは難しかった。

しかし、冷戦構造が崩壊した今は、日本の進めてきた原子力政策は正統で、将来にわたって平和利用の原子力しか存在価値を持たないだろうということを、広く世界に発言する時期がきたと感じています。

日本が平和利用全体に生きていき、二一世紀以降のリサイクル社会に対して貢献しようと思えば高速炉と関連した核燃料サイクルは必要です。

こういう先が読めた議論は、今の世界では日本ではできないと思っています。

日本はそういう議論ができる環境を持っていると思います。

### 高速増殖炉の重要性を長計で反映

【長期計画では、住民の理解とコンセンサスを重要視している一方、「もんじゅ」の運転再開にも重点を置かれています。両方のバランスについて、どうお考えになっていますか？】

「もんじゅ」の問題について、原子力委員会は、事故直後から対応してきました。

地方自治体のご要望に応じて政策決定への国民参加というから、原子力政策円卓会議というものを作って、広く皆さんのご意見を吸収し、それを反映する努力をしてきました。

同時に「もんじゅ」がどういう意味合いを持つ

かということについては、「高速増殖炉懇談会」を作って、時間をかけて十分な議論をし、核燃料サイクルとして位置する「もんじゅ」の重要性というものを再確認しました。その重要性は、今度の長期計画においても第三分科会を中心に議論され、策定会議でもこの重要性が再確認されました。

これは、住民の方々との接点を国が持って、取り組んできたのと、同時に、サイクル機構の方々が個別訪問をしながら、その必要性についての理解を住民から得てきた結果で、住民理解とコンセンサス、「もんじゅ」の運転再開という観点では、良いバランスにあると思っています。

### 長期計画で重要なバランス感覚 進んだ技術と考えを世界に発信



原子力委員会・藤家委員長

「六年ぶりに見直された原子力長期計画のなかでも特に大きく改革されたところについて、お聞かせ下さい」

現在、原子炉が北海道から九州まで五〇基以上運転されています。

これは関係者の努力も当然ありましたが、社会の厳しい目がこれを可能にしたのだと思っています。

従って、「もんじゅ」や「JOC」などの事故が重なり、原子力に対する国民の不安感の高まりから、従来の原子力政策の延長線上に二一世紀を見

るのではなく、原子力政策を再構築しなければいけないと認識し、新しい長期計画に取り組んできたわけです。

時代の要求と、原子力が持っている本質、二一世紀以降の人類文明や社会に貢献すべき観点などを上手くバランスをとることが、今度の長期計画で一番大事なことだと思っています。

時代の要求の観点からは、国民の皆さんには、原子力が分かりにくいという認識があるので、例えば、新しい委員会は原子力を一般の方に分かり易く、なおかつ開かれた情報をいち早く公開するという方向づけで歩みたいと思っています。

また、人類文明への貢献の観点からは、主体性を持った国際協力を挙げていますが、冷戦構造が変わった現在の世界においては、これまで日本が歩んできた原子力の研究、開発のやり方が正当化されるだろうと考えています。

私どもは、これから日本の技術と考え方を持って世界を走り回ろうと思っています。

### 原子力が社会に容認されるのが夢

「原子力にかける委員長の将来の夢は何でしょうか、お伺いします」

私は、原子力を考えるのに一〇年単位では考えていません。一〇〇年、一〇〇〇年の長いスパンで原子力の将来像を見えています。

これは、明らかに一つの大きな人類の科学技術の流れだと思っているからで、いずれ原子力は日常性のなかで社会に容認され、理解される時代が訪れると思います。それが私の夢です。

そうした時代が訪れるまでには、一人の人間の人生ではすまない、何代にもわたる努力が必要だと思っています。

そこまでの長いプロセスの一部分を、私は精いっぱい生きていきたいと思っています。(文責在記者)